



医師たるものには 使命に立ち向かうための何らかの才能が 必ずや備えられている

早春に思う

東北中央病院 院長 田中靖久

高校に入学して間もなく聞いたその言葉を、40年近くが過ぎた今でも良く思い出す。担任の英語教師が授業中に話された事である。人間にとって最も価値の高いものには次の二つが備わっている。先ず没我の幸福感を味わえるもの、次いでそれが永く続くもの。確かに男女間の営みでは没我の境地が得られるものの特に男性においては瞬時に終える、との例えも述べられた。未成年の私がそのとき男女の違いに可成りの関心を抱いたことを告白せざるを得ない。しかし、敬虔なキリスト教徒であった恩師の真意は、自らが信じる宗教の崇高さを伝える事であったに違いない。

学位の仕事をしていて、この恩師の教えに思い当たる機会があった。研究には壁が付きものである。テーマは骨粗鬆症の海綿骨における骨梁構造であった。先輩に言われるままに従来の手法で分析を試みていたが、どうしても壁を打ち破ることが出来ない。別の先輩に誘われて様々な分野の専門家が集う形の科学の研究会に参加する事になった。仙台から常磐線に乗り、恐らく5時間は費やして、格別の期待もせずに筑波の会場にたどり着いた。ところがそこで計算幾何学、地理学あるいは天文学の分野で繁用されている Voronoi 分割法に巡り会えた。骨梁構造の難物を一気に解決出来る方法を知って湧き起こった高揚感が忘れられない。帰りは鈍行列車と成って、行きにも増して長旅となった。しかし、道中にめくるめ

く幸福感が止むことは無かった。もっとも、停車する大きな駅の売店ごとに繰り返し購入しては先輩と飲み続けたい缶酎ハイの影響が少なからずあったかも知れない。後にこの研究の成果で骨形態計測学会賞を戴いた。

学生時代に結構読んだドストエフスキーの本に「自らに科学の才能の無いことを知った医者ほど落胆する者はいない」との一文があった。なぜ医師に限って他の分野の科学者以上に落胆するのだろうか。医学生の頃に分からず、ようやく納得できたのは可成りの年月を経てからである。我々臨床医が毎日の如くに会わざるを得ないのが謎だらけの疾病を抱える患者である。教科書は僅かばかりの回答を述べているに過ぎず、誤りですら記述される。筆者の専門分野で言えば、主訴として最も頻度の高い頸部痛や腰痛の解明が全くと言える程に進んでいない。患者は「くびが苦しい」、「腰が痛い」と言っては相次いで目の前に現れる。医師を生業とするものは否応なしに謎の解明を迫られながら生きている。

山形大学の若き医学生や研修医は現在そして未来に何を志しているだろうか。アカデミックな地位を望むもよし、一般の臨床医もまたよし。ただし、医学部そして大学病院には医学の謎を解き明かすための最良の環境がある。情報収集の容易さと最新の研究機器そして何よりも、多士多才の先輩や後輩に恵まれている。いかなる道を目指しても大学で早い時期に研鑽を積むことの利点は計り知れない。ロシアの文豪と言えどもその独断的な考えを易々と許す訳には行かない。医師たるものには使命に立ち向かうための何らかの才能が必ずや備えられている。